

トラックにこどもの絵を描く運動を展開する会社

株式会社 宮田運輸

本社：大阪府高槻市唐崎北3-24-12
従業員数：280人（社員253人，アルバイト27人）
事業所数：10 保有トラック：150台

「こどもミュージアムプロジェクト」，トラックにこどもの絵を描くという取り組みを宮田運輸ではそう名付け，賛同する企業・団体を募っている。情報化がすすみ，ネット取引が拡大するとともに物流業界は多忙を極めている。仕事に追われ，時間に追われたドライバーたちは余裕を失い，乱暴な運転が増え，事故も起こりやすくなっている。そんな中で「お父さん，頑張って！」と訴えるこどもの絵をトラックに描けば，やさしい気持ちで運転できる。それを見る周囲の車もやさしい気持ちになり，事故を減らすことにつながる。そういう効果をねらったものである。このプロジェクトの誕生のいきさつ，これまでの活動，今後目指す方向を宮田^{みやた ひろふみ}博文社長に聞いた。

■トラックが大好きだった

小さいころからトラックが大好きだったと，宮田さんは言う。自宅のすぐ隣が車庫で，毎朝そこからトラックが出ていき，毎

晩そこに帰ってきた。自分も大きくなったらトラックの運転手になるのだ……そう思い続け，1988年，18歳で宮田運輸に入社した。

宮田運輸は，大手運送会社を定年退職した宮田さんの祖父，宮田官太郎氏が1967年に創業した会社である。官太郎氏の長男，^{みつる}充氏が2代目，官太郎氏の四男で宮田さんの父，^{はつお}八男氏（現会長）が3代目社長を務めていた。

宮田さんが入社した当時の宮田運輸は，最大の得意先が大手に吸収合併され，売上



宮田博文社長

げの9割を失うという危機的な状況にあった。それに代わる新しい顧客との関係を確かなものにするために、八男社長は宮田さんに、ある食酢メーカーの仕事を担当させた。

宮田さんは、幼なじみの福田真さん（現専務）を誘い、ガラス瓶に詰められた食酢の木箱で手を傷だらけにしながら、それをトラックに積み込んで運ぶ仕事を、2人で黙々とこなした。お客様の要望を何もかも二つ返事で引き受けるという仕事ぶりが評価され、当初1台の仕事が、2台、5台、10台、30台と増えていき、会社は危機を脱した。

その後、会社は次第に成長し、創業から45年目に当たる2012年、宮田さんは42歳で4代目社長に就任した。就任早々、幹部社員を集めて合宿し、25年後の創業70周年に向けて、業績を上げ、雇用を生み出し、売上高300億円、従業員数2000人を目指すという長期目標を掲げた。

■ 5年前の接触事故

その翌年、2013年8月30日のことだった。宮田さんの携帯電話に、専務の福田さんから電話が入った。大阪外環状線で、同社のトラックがバイクと接触し、バイクで通勤途上の43歳の男性が負傷して緊急入院したという知らせだった。すぐに病院に向かうと霊安室に案内された。家族が遺体を取り囲んでいて、被害者の父と思われる年

配の男性が、宮田さんの名刺を受け取り、穏やかな口調で言った。

「たったいま、息子が息を引き取りました。どちらが悪かったのかわかりません。ただ息子には小学4年生になる娘がいました。これだけは覚えておいてください」

「誠心誠意、できる限りの償いをさせていただきます」。宮田さんは絞り出すような声で言って、病院を辞去した。

このときのドライバーも同じ43歳だった。管理職で、急ぎの仕事の応援のためにハンドルを握った。彼も男手ひとつで2人の娘を育てていた。警察に拘留され、残された娘たちのことが気になって、宮田さんが彼の家に向かうと、彼の母と姉が娘たちをみていた。2人は「すみません、すみません」と何度も深々と頭を下げて、宮田さんに謝った。「すべての責任は社長の私にあります。彼が警察から帰ってきたら、いままでと同じように働いていただきますから、決して心配しないでください」と宮田さんは2人に伝えた。

■ コンテナ背面に

こどもの絵をラッピングする

大好きだったトラックが人の命を奪い、幼い娘たちの未来を狂わせてしまったことが、宮田さんを大きな苦しみ突き落とした。70周年に向けて、世のため、人のためにと掲げた大きな目標も、色あせた空疎なものに思えた。走る凶器となるトラックな



トラックに描かれた子供たちの絵



ど、世の中から消えてしまったほうがいいのかもしれない…とさえ思ったという。

ふさぎ込んだ宮田さんに、いろんな人が声をかけ、慰め、励ましてくれた。「トラック、好きやったんやろ。そんなら、そのトラックを活かすことを考えな」というある人の言葉が、頭の中にいつまでも残り、「たしかにそうや」と思うようになった。亡くなった命を嘆いていつまでもふさぎ込んでいては、社長の勤めは果たせない。それより、今回の不幸な出来事を活かして、いまいる従業員の命を活かすことを考えなければ…。

そう思いはじめたとき、ある工場で「安全標語」を見る機会があった。「ヘルメットを被りましょう」「一旦停止しましょう」という「安全標語」が、たどたどしいこどもの字で書いてある。こどもの字だからこそ働く者の心に訴えるものがある。「これだ!」と思った。それを見て会社に帰ると、自社のドライバーたちも、自分たちが乗るトラックの運転席に、こどもや家族の写真

を貼ったり、「パパ、お仕事、頑張って」というこどもからの手紙を貼っていることに、あらためて気がついた。

これが、こどもたちに絵を描いてもらって、トラックのコンテナの背面にラッピングするというアイデアに結びついた。

■管理から心の共有へ

「トラックの安全運行を守るための方策は、これまで管理と監視ばかりでした」と宮田さんは言う。たとえば、貨物自動車運送事業法は「点呼」を義務付けている。各事業所の管理者は、一日の乗務のはじめと終わりにドライバーと対面し、日常点検の報告を受け、アルコールをチェックし、健康状態を確認する。あるいは、ドライバーがトラックに乗り込めば、運行状況がタコグラフとGPSで記録される。さらに、最近ではドライブレコーダーが、車外と車内の

様子を画像と音声で延々と記録し続ける。

管理と監視の精度をどこまでも高めていけば、ミスは犯しにくくなるが、ドライバーはどんなときにも気を抜くことができず、管理され監視されているというやらされ感がどんどん膨らんでいく。

そんな中、「お父さん、頑張って」というこどもの手紙や絵は、ドライバーの心にやさしさを蘇らせる。タコグラフやドライブレコーダーが「いま」という瞬間に意識を集中させるのに対して、こどもの手紙や絵は、こどもたちが大きくなっていく何年も何十年も先にまで視野を広げ、このこどもたちのために頑張ろうと思わせてくれる。

そんな発想から、トラックに乗務するドライバーのこどもたちに絵を描いてもらい、その絵をデジタル化し、拡大してフィルムに焼き付け、トラックのコンテナの背面にラッピングするという取り組みをはじめた。同社のトラックは1台1台、乗務するドライバーが決まっており、そのドライバーのこどもたちに絵を描いてもらう。トラックの買い替え時期まで待つてラッピングするから、時間がかかるものの、現在150台ある同社のトラックのうち46台に、こどもたちの絵がラッピングされている。

■こどもミュージアムプロジェクト

こどもたちの絵をラッピングしたトラックは、その後の同社の事故発生件数を40%引き下げた。急発進、急停止が減って燃費

も向上した。さらに周りの人たちの心も和ませ、サービスエリアで停まっていると、「この絵、いいですね」とか「写真、撮っていいですか」と声をかけられるようになった。「渋滞でイライラしていたが、あの絵を見て心が穏やかになりました」と手紙をくれた人もあった。

このことが新聞、雑誌、テレビで紹介されるようになると、自社のトラックでも同じことをやってみたいという声があがりはじめた。同社はこの取り組みを「こどもミュージアムプロジェクト」と名付け、賛同者を募り、2017年からは、国際CSV事業部というプロジェクトの普及啓発専門部署を立ち上げ、そのスタッフは幼稚園に出向いて「こどもミュージアムプロジェクト」がどのようにして生まれたのかを紙芝居にして紹介し、園児たちに絵を描いてもらって、それもラッピングするなどの活動をはじめている。

「こどもミュージアムプロジェクト」に賛同を表明した会社は、これまでに全国で44社。こどもたちの絵をラッピングした車は、宮田運輸の46台のほかに150台に上る。宮田さんは、これを東京オリピックが開かれる2020年までに、全国のトラック150万台の半数75万台にまで広げ、さらに海外にも広げていきたいと考えている。

■幸福創造企業への道

「こどもミュージアムプロジェクト」を



メリータイム

推進するうちに、会社というものの理想のイメージが宮田さんの中で少しずつ変化していった。「会社は、売上げや利益の数字のために人を管理し監視して働かせる場ではなく、人々が自分たちの幸せを求めて力を合わせる場であるべきではないか」と宮田さんは考える。そうした考え方に沿って、次のような取り組みをはじめた。

[メリータイム]

朝の「点呼」の時間を同社では「メリータイム」と呼び、点検報告、アルコールと健康状態のチェックの後、管理職がドライバー1人ひとりのタンブラーに熱いコーヒーを注いで「気をつけていってらっしゃい」と送り出している。タンブラーは1人ひとり自分用のものが決まっていて、そこには、本人たちに内緒で家族に集まってもらって描かれた絵や写真、「お父さん、今日も元気で行ってきてね」「無事に帰ってきてね」などの文字がラッピングされている。

[社歌の作詞作曲と合唱]

2017年の創立50周年には、社歌として、



みらい会議

家族からのお父さん、お母さんへの応援歌をつくり、家族に集まってもらい、合唱してもらってCDをつくった。CDは毎朝の朝礼で流している。

[みらい会議]

各部門の業績報告会だった幹部会議を「みらい会議」と改称し、従業員なら誰でも参加できるようにした。さらに、得意先、銀行、同業他社など社外の人たちにも呼びかけて加わってもらっている。各部門の業績報告は、管理職以外の一般社員が行う場合があり、そこで提起された問題も、一般社員がディスカッションに参加して解決の方向性を決めている。業績報告会の後は「心のディスカッション」として、みんなで人生観や死生観などを語り合い、ヨガを行い、最後に懇親会を開いて終了する。毎回80人程度が参加する。

[幸福創造という経営理念]

同社はいま「幸福創造企業として永遠に発展する」という経営理念を掲げている。具体例として、宮田さんは、一昨年に入社したある社員の例を話してくれた。人との

コミュニケーションがまるで苦手な人だった。さまざまな会社の採用面接にことごとく落ちてしまい、ある人から「お宅で面簿を見てもらえないか」と頼まれて引き受けることにした。自宅から毎日1時間半かけて通ってくるのだが、ほとんど仕事にならなかった。それでも「今日もよく来たな」と言葉をかけ続けた。1年が過ぎ、彼が数字にはかなり強いらしいということがわかってきて、経理の仕事を担当させた。いまはこの分野でバリバリ仕事をしてくれるようになったという。

宮田さんが入社した30年前の物流業界は、得意先から言われたものを言われたとおりに運ぶだけだったが、最近の物流業界

は、得意先に代わって原材料を調達、保管、得意先の工場の生産計画に合わせてそれを供給し、さらに得意先の営業の受注情報に従って製品を出荷するなど、物流全体を一括して請け負う形に変わっている。メーカーと物流会社は、不可分といえるほど深い結びつきを保つようになり、それだけ相互の信頼関係が重要になっている。

会社本位ではない、従業員本位の経営によって、宮田運輸の従業員は、自分たちの幸福のために骨身を惜しまず働いている。それが、同社の活力と安定感を生み出し、得意先からの信頼につながり、さらに評判を聞きつけた会社からの新しい業務提携の依頼につながっているという。

取材・執筆 山口 幸正 (やまぐち ゆきまさ)

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動を取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「絵で見る創意くふう事典」をネット公開中